

映画「秋津温泉」の撮影

昭和三十七年（一九六二）に公開された映画「秋津温泉」は、奥津温泉を舞台とした藤原審爾作の同名の小説を映画化したもので、今年で公開五十五周年を迎えます。

この映画は、主演女優・岡田茉莉子の映画出演百本記念作品として企画され、岡田さんのプロデュースで制作されました。監督・脚本も岡田さんの指名により、当時はまだ若手だった吉田喜重が務めることとなり、これまでにない長期ロケが津山市と奥津町で繰り広げられることになりました。

当時の新聞には、ロケに使用するマント・傘・雪沓の貸し出しや、

ロケの協力を岡田茉莉子の名前で依頼する広告が掲載されており、この映画にかける岡田さんの意気込みが感じられます。

二月のロケは、昭和三十七年二月七～九日に行われました。原作のモデルとなった旅館は、作者の藤原審爾がしばしば投宿した河鹿園でしたが、改装により近代化したため、舞台は大釣荘に変更され、雪のシーンが撮影されました。岡田さんが演じるヒロイン・新子と恋人役の俳優・芥川比呂志が演じる河本周作のクライマックスシーンは般若寺の前庭でロケが行われ、初めての奥津ロケに多くの温泉客が見物しにぎ

わったといえます。しかしこのロケの後、芥川が病気により降板したため、急きよ代役として長門裕之が立てられ、奥津ロケでの二人のシーンはすべてカットされ撮り直しというアクシデントもありましたが、撮影は続行されました。

二度目のロケは四月に津山と奥津で行われ、新子が奥津溪の満開の桜の幹に身を寄せて周作を見送った後に、手首を切って自殺するというラストシーンもこの時に撮影されました。この桜の木は、ケヤキの木に人工の桜の枝花をつけ、桜の木のようにカモフラージュしたのですが、この映画のラストを飾る名シーンを見事に演出しています。

最後のロケは五月下旬に行われ、

ンなどが撮影され、五月二十八日にすべての撮影が終了しました。

映画の封切は六月十六日、撮影終了からわずか二〇日足らずでの公開は、当時の映画製作がいかに急ピッチであったのかが想像できます。

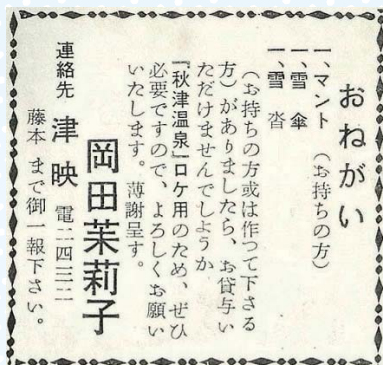
奥津温泉を舞台として繰り広げられる新子と周作の悲しい恋の物語は、多くの人々を魅了し、これをきっかけに奥津温泉の名は一躍有名になりました。また、この映画公開後、岡田茉莉子は吉田監督と結婚し、岡田さんにとっても色々な意味で記念すべき作品となりました。

映画「秋津温泉」は、そのストーリーや演出も素晴らしいですが、地元の前津山や津山の風景を映像に残している貴重な歴史資料ともいえます。大釣荘や久田小学校の建物、奥津溪でのラストシーンに映る未舗装の旧国道などが当時を知る人には懐かしく、知らない世代には新鮮に感じてしまうかもしれません。

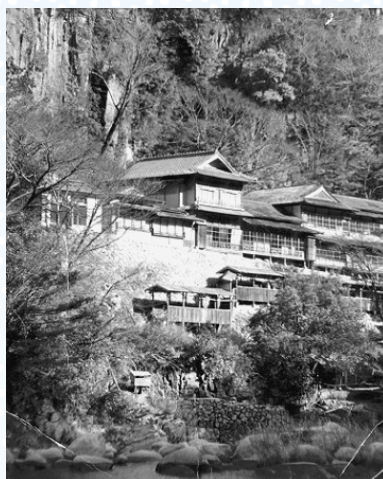
参考：「津山朝日新聞」、「女優 岡田茉莉子」

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733



ロケのための小道具借用の店
「津山朝日新聞」 S37・1・22



映画の舞台となった大釣荘



映画「秋津温泉」のチラシ

津山・奥津・落合・久田でロケが敢行されました。この時は物語の前半部分の撮影が主で、久田小学校が臨時陸軍病院となり、敗戦の玉音放送を聞くシーンや温泉の入浴シーン